

ナチ時代の患者と 障害者たち

Kranke und behinderte Menschen im Nationalsozialismus
— ドイツ精神医学精神療法神経学会 (DGPPN) 移動展覧会 —
“erfasst, verfolgt, vernichtet.” より

第 111 回日本精神神経学会学術総会
(大阪 2015 年 6 月 4 日 - 6 日)

本展覧会では 40 枚の掲示ポスターにそれぞれ日本語訳を添付しました。
このパンフレットは、それらのなかから図と説明文を
抜粋・構成して作成されています。

協 力

ドイツ連邦共和国大使館
神奈川県立精神医療センター

目次

ご挨拶	3
「ナチ時代の患者と障害者たち」によせて	3
ドイツの精神科専門学会とその自らの歴史の見直し	3
移動展覧会ポスター一覧	6
はじめに	7
ナチ時代の民族衛生学	8
強制断種	9
ヴィルヘルム・ヴェルナー	9
殺戮	10
殺戮システム	10
アドルフ・ヒトラーの命令書	10
「T4」作戦	11
秘密の漏洩	11
殺戮施設	12
患者たち	13
マグダーレン・マイヤー・ライプニッツ	13
家族への通知	13
イルマ・スパーリング	14
抗議活動	15
ユダヤ人患者たち	15
「T4」作戦終了後の殺戮	16
第二次世界大戦終了後：抑圧と回想	17
裁判	17
ドイツ連邦共和国大使からのご挨拶	18
編集後記	19

ご挨拶

「ナチ時代の患者と障害者たち」によせて

第 111 回日本精神神経学会学術総会会長
奈良医科大学精神科教授
岸本年史

このたびドイツ連邦共和国大使館の後援をえて、特別展「ナチ時代の患者と障害者たち」を本学術総会において開催することを喜びとするものです。

ドイツ精神医学精神療法神経学会 (DGPPN) は、歴史の中の暗黒であるナチ時代 (国家社会主義時代) の精神医学についての移動展覧会「Kranke und behinderte Menschen im Nationalsozialismus. "erfasst, verfolgt, vernichtet"」を近年ドイツ各地で行っております。その移動展覧会をドイツ大使館の後援を得て開催いたします。

過去を振り返り、現実を直視し、将来を展望し、人類に希望を見出すことができれば幸いです。この展覧会を開くにあたり、尽力・協力をいただいたアーヘン大学 Frank Schneider 教授、神奈川県立精神医療センター所長 岩井一正博士ら関係諸氏に深謝します。

ドイツの精神科専門学会とその自らの歴史の見直し

フランク・シュナイダー (Prof Dr. Dr. Frank Schneider)
アーヘン Aachen

ナチ時代 (国家社会主義時代) の精神医学は、精神科の歴史の最も暗い部分です。すでに 19 世紀末には医師や医療系の政治家たちの間で、「国体」の健全化のために取り得る対策、民族衛生学や優生学について議論がなされています。この事情はドイツでだけではありません。また、精神障害者や知的障害者の断種、不治の病の患者の「安楽死」もすでに懸案事項にされていました。第一次世界大戦中には、施設にいた何千人もの患者が餓死し、なおざり

- von Cranach M, Schneider F. In Memoriam. Erinnerung und Verantwortung. Remembrance and responsibility. Ausstellungskatalog, Exhibition catalogue, Springer, Berlin, 2010.
- Schneider F (Hrsg; 2012) Psychiatrie im Nationalsozialismus – Gedenken und Verantwortung. Psychiatry in National Socialism. Remembrance and Responsibility. Berlin: Springer.
- Schneider F. Psychiatrie im Nationalsozialismus - Erinnerung und Verantwortung. Psychiat Neurol Jap (Tokyo) 2011; 113: 782-796; Übersetzung und Vorwort: Kazumasa Iwai
[フランク・シュナイダー：『ナチ時代の精神医学——回想と責任 ドイツ精神医学精神療法神経学会 (DGPPN) の 2010 年 11 月 26 日ベルリンにおける追悼式典での談話』「精神神経学雑誌第 113 巻第 8 号」、日本精神神経学会、東京、2011 年、782 頁～796 頁 (訳・序文：岩井一正)]。
- Schneider F, Lutz, A (Hrsg; 2014) Erfasst, verfolgt, vernichtet. Kranke und behinderte Menschen im Nationalsozialismus. Registered, persecuted, annihilated. The Sick and the Disabled under National Socialism. Berlin: Springer.

にされて亡くなりました。医師や社会が精神障害や知的障害を持つ人を軽視していることはすでにこの頃からあきらかでした。

ドイツでは国家社会主義政権によって1933年に「遺伝病子孫予防法」が導入されました。統合失調症、躁うつ病、遺伝型のてんかん、ハンチントン舞蹈病、盲、聾、重度の身体的奇形、重度のアルコール依存症を病んだ者を、本人が嫌がっても妊娠不能にできるようになりました。この法律によって40万人もの人々が断種されました。1939年からは、治療介護施設で患者の殺害行動が計画されました。ドイツの精神科医たちは実際に患者に会ったこともないのに、その生死を決定したのです。1940年～1941年には、7万人を超える患者たちが病院や施設から連れて来られ、殺戮施設でガスにより窒息死させられました。さらに30以上の小児病棟で、5000人以上の子供や青少年が殺害されました。患者を選別する主導的観点は推定上の人間の「価値」でした。いうところの「価値」は「治癒可能性」、「教化の見込み」、「労働能力」を尺度に判定したのです。

この「安楽死」計画は1941年に終了しましたが、それで患者の苦しみと死が止んだわけでは決してありません。戦争が終わるまで何千人もの患者が介護施設や精神科施設で餓死し、または医薬品を投与されて殺害されました。「安楽死」計画により、全部で30万人にもものぼる人々が犠牲になりました。終戦後、多くの医師や患者殺害に加担した人々は、その行為の責任を問われることもなく、あるいは比較的軽い処罰にとどまりました。精神科の専門学会、今日のドイツ精神医学精神療法神経学会（DGPPN）はこの犯罪に関して随分長い間沈黙を守ってきました。罪を明らかにする試みは早い時期にもありましたが、そのような試みは妨害され、抵抗にあいました。国家社会主義時代のドイツにおける精神医学の歴史が本格的に研究され始めたのは1980年代の初め頃からです。重要な一歩となったのは、展覧会「追悼録 In Memoriam」の開催でした。1999年にハンブルクの世界精神医学会（WPA）で催され、初めて国際的な場で大規模に公開されたのです。

DGPPNはようやく2009年に会則改訂の際に、自らにも特別な責任があることを認めました。その責任とは、自分の前身組織が国家社会主義の犯罪、すなわち大量の患者殺害と強制断種に加担したことから生じたものでした。自らの歴史の見直しは今ではDGPPN内部の中心的なテーマになっています。2010年の年次総会を皮切りに、毎年多くの行事が国家社会主義時代の精神医学の犠牲者に捧げられました。2010年総会のハイライトのひとつは3000人が参加した追悼式典でした。この式典の中で、ドイツ精神医学が精神疾患や知的障害を持つ人々の殺害、強制断種、倫理に反する研究、精神科の同僚たちの追放に対して責任があることが認められました。当事者や家族が個人的な体験について講演し、多くの人々の一人一人の苦しみと運命が思い起こされ、感銘を与えました。学会の会長はスピーチで追悼式典の背景についてふれ、次の言葉で締めくくりました。「ドイツ精神医学精神療法神経学会を代表して、犠牲者とそのご家族に対し、みなさまが国家社会主義時代にドイツ精神医学の名の下にドイツの精神科医によって受けた苦しみと不正・不当な行為に対して、またその後続く時代にドイツ精神医学がかくも長く沈黙を続け、

事態を軽視し、抑圧してきたことをお詫び申し上げます」

同じく2010年に、DGPPNは国家社会主義時代の自らの歴史を見直す研究プロジェクトを立ち上げました。さらにDGPPNは国際委員会に研究委託の公募と、科学的な見直し過程での助言を依頼しました。

その他、2011年に精神科医フリードリッヒ・マウツおよびフリードリッヒ・パンセの名誉会員資格を剥脱しました。この2名はナチの安楽死プログラムで鑑定人を務めており、第二次世界大戦後には学会の会長に就任し、名誉会員となっていました。

しかし見直しは、これで完了したわけではありません。DGPPNはここ数年の活動に自足することなく、それ以前の何十年もの沈黙を長い時間をかけて克服し、責任を自覚する立場に自らを位置づけたいと考えています。ドイツの医師たちの募金活動によって、数多くの記録を展示する移動展覧会が実現しました。この展覧会の指針となっているのは、生命の価値についての疑問です。さまざまな開催地で、殺戮行為の前提となった思想や制度に取り組みます。展覧会は排斥や強制断種から大量殺戮に至るまでの不正・不当な行為やおぞましい犯罪を総括し、具体的な例を示して被害者、加害者、犯行に関与した者、さまざまな分野の反対論者を考察し、最終的には1945年から今日までこの出来事がどのように扱われてきたかを検証します。ここでは過去の過ちから学ぶだけでなく、自分自身の現在と未来の行動に反映させ、鋭敏な指針とすることが重要です。この展覧会は公の追悼の場では長い間片隅に置かれてきた人々に注目しています。犠牲者とその家族です。ここでは犠牲者と家族が正に尊重されねばなりません。そのため、展覧会はひとりひとりの人間とその運命を主に扱っています。このテーマは今もアクチュアルです。そのことは、例えば現代の生命倫理を巡る議論と関連づけると容易に理解できます。

国家社会主義の犠牲者追悼の日を機に、移動展覧会は2014年1月27日ドイツ連邦議会でヨアヒム・ガウク連邦大統領の後援のもと開会されました。その日からこれまでの間にドイツ国内やヨーロッパ域内の多くの地域で開催しました。大阪における2015年の学術総会で本展覧会をご紹介できる機会をドイツ精神医学会に与えて下さいましたことに対し、日本精神神経学会（JSPN）に心より感謝申し上げます。

移動展覧会ポスター一覧

ポスター番号	主 題
1, 2	➔ 表題
3	➔ はじめに
4	➔ 協賛者一覧、謝辞
5 — 12	➔ 第 1 章 加害者と共犯者 / 犠牲者 (第 2 章 優生学～生命の価値の決めつけ 本展覧会では割愛)
13	➔ 第 3 章 民族衛生政策
14	➔ 保健局による遺伝的調査
15, 16	➔ 強制断種とヴィルヘルム・ヴェルナー
17	➔ 第 4 章 殺戮
18	➔ 殺戮作戦
19 — 23	➔ 「T4」作戦
24 — 27	➔ 患者たち
28	➔ プロテスタントの戦略
29	➔ 抗議
30	➔ ユダヤ人患者たち
31 — 32	➔ 犠牲者イルマ・スパーリング
33 — 35	➔ 「T4」作戦終了後の殺戮
36 — 40	➔ 第 5 章 1945 年後：抑圧と回想

はじめに

ナチの迫害の犠牲者のなかには、精神障害者や知的障害者がいた。彼らはドイツ国家共同体の「お荷物」と考えられた。

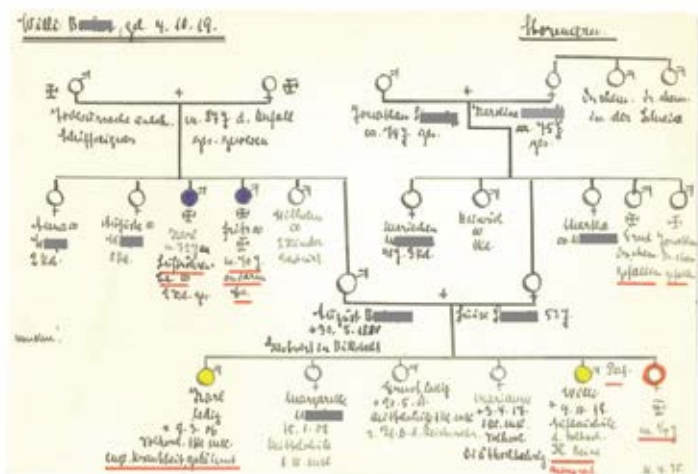
1934 年から本人の意志によらない 40 万人もの断種と、治療介護施設での 20 万人以上の殺戮がなされた。殺戮はドイツ社会のなかで行われ、精神科医、神経科医、小児科医や他の医師、施設管理者や看護師がそれに加担した。占領下の東欧でも、ポーランドとソビエトの数万人の入院患者に大量殺戮が行われた。

数え切れないほどの家族が親族を失った。しかし、1945 年のあと、長い間、誰も犠牲者を顧みなかった。多くの犠牲者家族の間でも、この出来事に口をつぐんでいた。一方、犯人のなかには、戦後のドイツでキャリアを断たれずにさらに出世したものもいた。本展覧会は、この大量殺戮を可能にした思考およびその行動様式に焦点をあてている。

ナチ時代の民族衛生学

1933年以前からドイツでは民族衛生学は影響力のある学問になっており、ナチ政権下で公の政策となった。個人の「遺伝的価値」は社会および健康政策の基準になった。遺伝的に健全な家族には縁談、子供手当、教育手当を支給する一方で、遺伝的欠陥をもつものには、結婚し家庭を持つことを妨げる圧力をかけることもあった。

全国民が「遺伝的価値」を登録され、医師は民族衛生学の指導を受けた。多くの医師や官僚たちは「劣等分子」を軽視するようになっていた。



アルスタードルフ治療介護施設で作製された遺伝健康ファイルのカード

このファイルカードに、ハンブルクのアルスタードルフ収容所の医師達は収容者の血統図を3000枚以上も記載した。自分たちが異常と認めるものは全て記載している。これらは強制断種を決定する資料となった。断種に至るプロセスの段階や、断種の手技も記された。ほとんどのプロテスタントの施設がそうであったように、ここアルスタードルフの管理者もこの民族衛生政策に一も二もなく同意したのであった。

強制断種

1933年に成立した「遺伝病子孫予防法」の下で40万人以上が断種させられ、この手術の結果5千人の人が死亡した。

遺伝的調査によって「遺伝的欠陥」である「精神薄弱」または「統合失調症」と報告された人々は、公衆衛生担当官および施設所長により強制断種の要請が行われ、医師と判事は遺伝健康裁判所で判決を下した。それに従い、産婦人科医および外科医は手術を実行した。

ヴィルヘルム・ヴェルナー 1898 - 1940

ヴィルヘルムは1898年9月18日、ニュルンベルク近郊で生まれた。彼の一家は貧しく、1902年、母と2歳下の妹と共に救護施設に移り住み、1906年に両親は離婚した。ヴィルヘルム・ヴェルナーは恐らく聾啞であった理由から、1908年頃、「白痴」という診断でヴェルネック治療介護施設に移され、1934年から1938年の間に強制断種をされた。1940年10月6日、ヴェルネック施設からピルナ・ゾネンシュタイン殺戮収容所への第一陣として移送され、殺された。



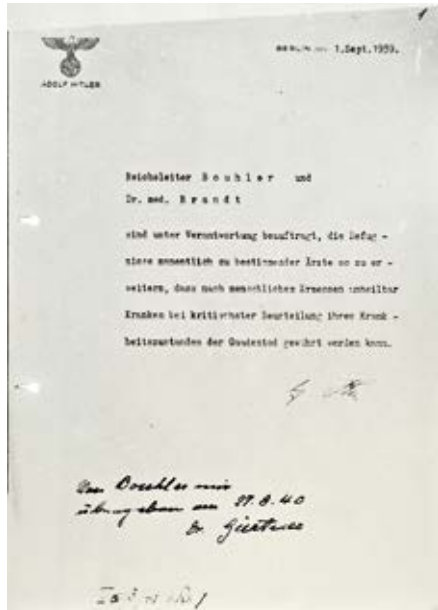
ヴィルヘルムの描いた絵

ヴィルヘルムは彼が受けた強制断種を44枚の絵に描いた。彼が入所していたヴェルネック施設職員がこれらの絵が描かれたノートを保管していたが、後にプリンツホルンコレクションに寄贈された。作品の中では、強制断種が犠牲者の身体と人格にいかにも深く侵襲したのかを表現していた。彼の絵は修道女、黒いスーツの男性、丸っこいピエロ、裸の男など決まった人物像を描いている。患者たちは、しばしばピエロとして描かれ、厳しい表情で診察を受けている。描かれた旗と腕章からナチ時代であることがわかる。

殺戮

1939年秋から、病気や障害のある人々は網羅的に登録され、1940年1月から殺戮が始まった。この殺戮作戦の本部所在地は、ベルリンの「ティアガルテン通り4番地(Tiergartenstrasse 4)」にあり、その住所から殺戮作戦には「T4」というコードネームがつけられた。殺戮作戦は「第三帝国秘密事業」とされ、施設監視責任者である地域政府機関に加えて、内務省と、のちに法務省も関与した。

殺戮システム



アドルフ・ヒトラーの命令書

<抜粋>ナチ総統府長官ポウラー、医師プラントに、治癒の見込みがないほど病状が重いと判断される場合、その患者の病状に関して厳格に鑑定をした上で、特別に指名された医師に彼らが置かれている悲惨な境遇から救出する裁量を許可する権限を与える。

このヒトラーの個人的な便箋の覚え書きは、ヒトラーによる殺害命令書として唯一現存するものである。日付は戦争開始時にさかのぼって有効にしてあり、これが行政的「安楽死」施行の基礎となった。法律家も1945年以降は自己弁護のためにこの覚え書きを引用した。



左
カール・プラント 1904 - 1948
アドルフ・ヒトラーの侍医

右
フィリップ・ボウラー 1899 - 1945
ナチ総統府長官

「T4」作戦



1939年10月から内務省より施設に登録カードが送られ、多くは医師や管理者がそれに記入した。

特定の診断名(統合失調症、てんかん、精神薄弱など)のついている全ての患者、5年以上施設入所している患者、ドイツ人またはその血縁以外の者、裁判所で施設入所が決定された触法精神障害者が登録された。

記入された登録カードは3人の鑑定人と鑑定責任者に送られ、鑑定人は殺害実行の判断をプラスサイン(“+”)で示した。

これらの登録カードに基づいて、殺戮施設で誰がガス毒殺されるべきかが決定され、外部鑑定人が7万人以上の殺人処分を犠牲者に直接会うことなしに判断した。

施設管理者の多くは、手のかかる患者については今後、就労可能な者と区別され、待遇を悪くされざるをえないのだろうと考えた。登録カード記入の目的が知られるようになると記入を中止するキリスト教施設もあった。このような場合は「T4」組織の医師が施設を訪れ、現地で患者を選定した。

秘密の漏洩

「T4」作戦は、「第三帝国秘密事業」とされていたが、すぐに国民の知るところとなった。大きな殺戮施設の近隣住民は、患者の乗ったバスがどこに向かうのか知っていた。ハダマー施設の近辺では子供たちが「また殺人バスだよ。」とよく噂していた。



殺戮施設



ハルトハイム殺戮施設の煙突から煙が上がっている唯一の写真である。これを撮影したカメラマンはナチ政権反対派であるキリスト教一派に属していた。この一派の農場がハルトハイム施設からほんの路地一筋隔てたところにあった。

施設では60～70人の職員が雇われており、以下のような構成であった。

- －2名の医師
- －管理上の諸手続および渉外担当の事務長
- －犠牲者の家族や政府機関との通信を執り行う秘書
- －患者の移送に同行し、ガス室につれてゆく看護師
- －バスの運転手
- －火葬作業員
- －医学的に興味ある所見があれば殺害前に撮影するカメラマン



これらの職員の殆どは施設内で暮らし、その同じ場所で患者が殺害されていた。大量殺戮は職員の日々の生活に密接に結びついていた。

患者たち

マグダーレン・マイヤー・ライプニッツ 1916-1941



マグダーレン・マイヤー・ライプニッツは、1916年1月25日エスリンゲンで生まれた。彼女は、16歳でザレムの全寮制高校に入学した。過労を感じ、ひどい気分変動が始まった。彼女は数年後、チュービンゲン大学病院で初めて統合失調症と診断された。病状が安定しなかったため、1938年、家族はエスリンゲンのケネブルクにある個人病院に彼女を受診させ、そこに3年間入院した。

家族への最後の医学的な報告は、1941年3月12日の日付で、以下のようなものであった。

「娘さんに関して新たにご報告することは何もありません。彼女はまだ物憂げで無気力です。一時的に落ち着かない様子がみられましたが、すぐにおさまりました。」と。その後、彼女はハダマー殺戮施設に移送され、1941年4月22日に殺害された。

刑事告発：1945年4月22日アメリカ軍がエスリンゲンを占拠した。その数日前、マグダーレンの父は殺害に対して刑事告発した。なぜ彼はそのタイミングで告発したのかは知られていない。しかしそれから数十年間、家族はこの出来事を公には語らなかった。

家族への通知



〈抜粋〉第三帝国国防軍政治委員の指導のもと、政府の命により、最近我々の施設に移送されてきたあなた方の娘、マグダーレン・マイヤー・ライプニッツが、肺結核による肺出血で、5月8日に予期せず亡くなったことを残念ながらご報告しなければなりません。官命に従い、地域警察の権限において彼女の遺体は速やかに火葬され、遺品は消毒されました。

「T4」の施設の事務官たちは、犠牲者の家族らに対し、一通一通違うものに見えるように装った上で、何万通もの通知を出した。通知の内容のほとんど全てが偽りだった。

1941年5月8日付 ビルナ・ゾンネンシュタイン殺戮施設からの偽りのお悔やみの手紙

イルマ・スパーリング 1930-1944

イルマ・スパーリングは1930年ハンブルクで、会社員の父と主婦である母との間に12人兄弟の7番目として生まれた。父は1933年政治的理由により逮捕され、その後失職した。母は病気になり、一家は窮地に追いやられた。

イルマは3歳の時にローテンプルクにある小児病院に入院した。「くる病があり、落ち着いたなさと興奮状態を精神薄弱児である。」と報告され、1933年12月アルスタードルフ施設に収容された。



施設の医師は、彼女は施設にとどまる必要があるという判断を繰り返し示した。

1943年、イルマと227人の少女達はウィーンにあるワグナー・ヤウレック施設に移送され、そこから更にアム・シュピーゲルグレンツの「小児病棟」に移された。彼女はそこにいる間、何度も診察やいわゆる人体実験を受けた。

1944年1月8日、彼女はおそらく睡眠薬の過量投与により13歳の生涯を閉じた。

1980年代になり、彼女の姉妹であるアンチェ・コーゼムントはイルマの生涯について調べた。アンチェは「安楽死」犠牲者家族であるということ公表した最初の家族の一人だった。

彼女は、ウィーンにあるバウムガルトナーホッフ精神病院の脳標本室にイルマの脳の標本が保管されていることを突き止めた。オーストリア政府との交渉で、1996年、その標本はハンブルグに埋葬された。

ハンブルクのアルスタードルフには彼女をしたのでイルマの名前がつけられた通りがある。



抗議活動



ミュンスター枢機卿、クレメンス・アウグスト・フォン・ガレンの司教祝聖式 1933年10月28日

カトリック教会は強制断種に反対してきた。多くの記録文書から、人間を経済的価値によって分類してはならないという信条を持っていたことが明らかにされている。精神病院における殺戮が始まったとき、司教、司祭たちは文書、覚書、交渉を通じてその政策の変更を試みた。同時期に、司教会は繰り返し精神病患者や障害者を殺戮することに反対を表明した。

1941年8月3日ミュンスターで行われた、フォン・ガレン枢機卿の説教において「安楽死」は殺戮と明言された。ソビエト連邦への侵攻の2ヶ月後であり、国民の戦争長期化への不安はとても強く、体制側は人気のある枢機卿をあえて逮捕するようなことはしなかった。それゆえ、この説教は不問に付され、多くの複写がひそかに頒布された。この結果「T4」作戦は1941年8月24日に中止された。

しかしながら、患者たちはより目立たない方法で殺され続けたのである。

ユダヤ人患者たち

ユダヤ人患者は精神疾患や障害のためだけでなく、ユダヤ人であるがゆえに迫害され、二重に危険にさらされた。移住受け入れ国側の規則によって、障害や精神疾患を有する人々が入国することはほぼ不可能であったため、彼らの家族らが移住しても彼らはドイツに取り残されることになった。そのような状況で、施設職員や他の患者はユダヤ人患者を差別した。そして、彼らの隔離追放命令が繰り返し発せられた。あらゆるユダヤ人患者は診断にかかわらず、「T4」登録カードによって把握されていた。

1940年初夏に彼らのうち2,000人以上が「特殊作戦」の犠牲となった。多くのユダヤ人患者が「T4」作戦のもと東部の絶滅収容所で殺戮された。

1940年秋、家族はユダヤ人患者の死亡通知を受け取るようになった。表向き、ルブリン近郊のヘウム（ドイツ占領下ではホルムと呼ばれた）にある治療介護施設からの送付は、

2000人のユダヤ人患者にのぼった。犠牲者の第一陣はいくつかの施設に集められた後、1940年夏にブランデンブルク殺戮施設に移送され、ガスで殺された。当時ホルムの施設はもはや実在はしなかった。通知に使用されたレターヘッドは事実を隠すためのものであった。この「機密作戦」がヨーロッパ系ユダヤ人大量虐殺の始まりであった。1942年5月ベルリンの民間クリニックから移送されたエステル・マイヤーの死亡証明書に記された事例番号「X2486」は、おそらくホルム施設の帳票に記録されたその時までのユダヤ人虐殺の犠牲者数を示している。



1942年7月21日付の
エステル・マイヤーの死亡通知

T4 作戦終了後の殺戮

「T4」作戦は1941年に終了した。しかしその間に殺害された人数よりも、作戦終了から第二次世界大戦終了まで、すなわち1942年から1945年にかけて殺された「安楽死」犠牲者の方が多かった。

「T4」作戦の本部はなお中心的な役割を担い続けた。

帝国委員会による「遺伝的調査」を通じて子供や若者の殺害を指示していた。

「14f13」作戦の一環として委員会の医師達は2万人を超える収容者を選定し、選ばれた収容者はピルナ - ゾンネンシュタインやベレンブルク、ハルトハイムの殺戮施設でガスによって殺された。

何万人もの患者達は郊外に移されたが、そこには医師や看護師が飢餓や薬物によって患者達を殺害する新しい殺戮施設ができていた。

多くの施設では、体力のあるものに優先的に食料の配給を行い、その結果、重症な患者達を計画的に大量に餓死させた。

戦争が長引くにつれ、精神的または身体的な病気を抱えている人々、特にポーランドやソビエト連邦からの強制労働者、空襲の後に戸外を錯乱して徘徊する高齢者達などが次々と殺害の犠牲となった。

1941年以後、ドイツ国民はこのようなひそかにおこなわれた殺戮に、もはや動揺をみせなくなっていた。

第二次世界大戦終了後：抑圧と回想

強制断種をされた犠牲者、殺戮施設の生存者、そして殺害患者の家族たちへの支援は、1945年以降ほとんどなかった。「劣等分子」や「遺伝的欠陥」という烙印は長く影響をした。多くの施設における死亡率は、戦後当初は高止まりしていた。

これらの被害者は、長年にわたり、ナチの迫害の犠牲者であると認知されることなかった。

多くの医師や看護師は、少なくとも殺人を目撃していたが、1945年以降もそれぞれの施設で働き続けた。医療的犯罪に関与した多くの研究者たちも、それぞれのキャリアを継続した。犠牲者たちは1980年代になってようやく公に追悼されはじめた。

裁判



ニュルンベルグ医師裁判 1947年

カール・ブランドとヴィクトール・ブラックは1947年ニュルンベルグ医師裁判で死刑を宣告され、翌年、刑は執行された。

1945年にはすでに米国の軍事法廷において、ハダマー施設の職員に対し、ポーランド人やソビエト人の強制労働者に対する殺戮について有罪が宣告されていた。

しかしながら、ドイツ人が多くの精神病院の患者を含むドイツ人に対して犯した罪に対する告訴はドイツの法廷で扱われた。戦後早々は、加害者や共犯者たちの徹底的な追究が行われ、厳罰に処されるものもいた。

しかし、1950年代以降、長期化した捜査や裁判は軽微な罪にとどまったり、不起訴や無罪になったりした。

ソビエト領とバイエルンだけは「遺伝病子孫予防法」を戦後に廃止した。またビュルテンブルグ - バーデン（現在のバーデン - ビュルテンブルグの北部）とヘッセンでは同法律は停止された。

しかしドイツ連邦議会は2007年まで「遺伝病子孫予防法」をナチの不当な行為として禁止することはなかった。

誰一人、強制断種の罪で告発されることはなかった。

ドイツ連邦共和国大使からのご挨拶

ドイツ連邦共和国大使
ハンス・カール・フォン・ヴェルテルン
Hans Carl von Werthern

私たちは歴史を忘れてはなりません。
何が起きたのかを常に思い起こすために。
なぜそのようなことが起こりえたのかを理解するために。
犠牲者を追悼するために。
いかにたやすく共犯者になってしまいうるかを、肝に銘じ続けるために。

そして私たちが追悼するのは何のためか。
犠牲者に、せめて今からでも敬意の念をもって向き合うために。
私たちがよく知る人物や組織も、実は加害者であったかもしれないと認識するために。
決して同じことが繰り返されないよう、取組を前進させるために。

私たちドイツ人の自己認識は変わりました。民主主義を信奉し、人権を推進するようになりました。出身国、性別、そして障害の有無を問わず平等な権利を求めようになりました。昔から常にそうだったのだと言いたいところですがそうではありません。それが私たちには分かっています。ですから、迫害、戦争、ホロコーストの記憶を風化させてはならないのです。

視線を過去に向け思い起こす行為には痛みが伴います。私たちが向き合おうとする責任が、私たちのよく知る人物や組織に帰せられるものである場合はなおさらです。ドイツでは、多くの人々が自分自身の関与した非道な行為を思い起すまいとしました。しかしよく見ると、治療行為に従事したとは決して言えない医師たち、国民間の相互理解に貢献したとは言えない外交官たちがいたことが分かります。さらによく見ると、彼らの一部が1945年以降のドイツ連邦共和国でも引き続き名士扱いをされていたことが分かります。

しっかり瞳を凝らし、そうした人々の経歴における1933年から1945年にかけての空白に目が向けられるようになるまでには、長い時間がかかりました。強い催促をうけたこともしばしばです。このプロセスはまだ終わっていません。そもそも決して終わることなどないのかもしれませんが、だからこそ、世代ごとに繰り返されていくこの取組を担う組織が増えていくのは重要なことです。

展示の中には、例えばヴィルヘルム・ヴェルナー氏の芸術的才能に触れる箇所があります。そうした箇所で、あれだけの規模の殺戮によって失われたものは一体何だったのかを私たちは痛感しはじめます。歴史関連の書籍に掲載されている犠牲者数の多さに私たちは愕然とさせられますが、その一人ひとりが生身の人間だったという感覚とともに痛感させられるのです。一人ひとりに、生存権、身体不可侵権がありました。その権利が奪われたのです。

このような恐るべき非道が繰り返されないよう、私たちは思い起こすのです。

本企画を実現されました関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げます。本企画とその普遍的メッセージが今回の展示を超えて日本で大きな関心を引き出すことを願ってやみません。

Quellenverzeichnis

Archiv der Evangelischen Stiftung Alsterdorf; Wilhelm Werner, Inv. Nr. 8083 (2008) fol. 1, 2, 9, Universitätsklinikum Heidelberg, Sammlung Prinzhorn; Bundesarchiv, RJM R3001 Bd. 24209; Bayerische Staatsbibliothek München, Bildarchiv; Bundesarchiv, Bild 146-1983-094-01; Bundesarchiv, R 179 18427; Archiv der Stiftung Liebenau; HHSTAW 461 32442; © Karl Schuhmann; NARA II, RG 549, Records of Headquarters, U. S. Army Europe; (USAREUR), War Crimes Branch, War Crimes Case Files (*Cases; not tried*), 1944-48, Box 490, Case 000-12-463 Harthelm (P) Vol. I/A; (Dokumentationsstelle Harthelm des Oberösterreichischen, Landesarchivs); Stadtarchiv Esslingen; Nachlass Magdalene Maier-Leibnitz (unverzeichnet); Stadtarchiv Esslingen; Nachlass Magdalene Maier-Leibnitz (unverzeichnet); Stadtarchiv Esslingen; Nachlass Magdalene Maier-Leibnitz (unverzeichnet); WStLA, M. Abt. 209 – Wiener Städtische Nervenlinik für Kinder: A2; WStLA, M. Abt. 209 – Wiener Städtische Nervenlinik für Kinder: A2, Foto: Johannes Plagemann; Bistumsarchiv Münster, Bildersammlung, von Galen, Clemens August (Nr. 166), Fotograf: Hubert Leiwering; © Jüdisches Museum Berlin, Foto: Jens Ziehe, Schenkung von Dorothea Wilke geb. Meyer; Ray D'Addario, Stadtarchiv Nürnberg, A65-III-RA-178-D.

編集後記

神奈川県立精神医療センター 岩井一正

2010年11月ベルリンで開催されたDGPPNの年次集会で、当時会長をつとめていたフランク・シュナイダー教授(RWTHアーヘン大学精神科)がPsychiatrie im Nationalsozialismus- Erinnerung und Verantwortungという表題で、かつてドイツで国家社会主義の犠牲となった精神疾患の患者やその家族に対する追悼談話をおこないました。この講演の全文は、「70年間の沈黙を破って」という表題のもとに、そこに至る学会の歴史や、遅まきながら開始された克服の取り組みとともに2011年に精神神経誌に発表されています。(精神神経学雑誌. 2011; 113(8): 782-96.)

記念すべき追悼談話から4年半の歳月が流れ、今回シュナイダー教授が第111回日本精神神経学会に招かれました。招待講演をされるシュナイダー教授は、その間にドイツ国内に限らず世界各地で開催されはじめた移動展覧会を日本でも開きたいと強く希望されました。その実現のために、多くの方々の協力が得られました。

本学会会長の岸本年史教授には、発案以降、全面的なご支援を賜りました。また奈良医科大学精神科で学会事務局長をされた芳野浩樹講師には度々なるご尽力に深く感謝する次第です。前東京外国語大学教授シュタインベルク先生には、学語的な相談以外にも実現にむけてさまざまな助言をいただきました。神奈川県立精神医療センターからは、発案当時の岩間久行所長の賛意に基づいて、人的財政的支援が与えられました。このバックアップなしには展覧会の開催そのものが不可能でした。以下にポスター、パンフレットの翻訳に協力した者の名を挙げます。

編集担当

中田雅子、茨木丈博、加藤秀一、森脇久視、林田治美

翻訳協力

青木麻梨、磯崎仁太郎、金澤さやか、木谷卓也、辻村理司、森長修一、築詰健次郎、横山琢也、吉池卓也、和田直樹

本移動展覧会は、ドイツ連邦共和国大使館の協賛のもとに実現しました。



公益社団法人 日本精神神経学会
The Japanese Society of Psychiatry and Neurology



ドイツ連邦共和国
大使館
東京



特定非営利
公益法人 神奈川県立病院機構
Asahi General Hospital Organization